

あかるくない

いたましいニュースのために選ばれたいたましそうな曲を聞く朝
進まない満員電車に乗せられて人はつぎつぎ傷口となる

祖父と祖母、父と母すら知らぬ人に「がん家系だね」と言われておりぬ
あかるくない未来の話をしたあとで姉と実家の床を拭えり

葬列といえなくもない朝までは生きてた魚を買う帰り道

米袋5キロぐったり抱きながらこれは泣いたり暴れたりしない

わたしよりさむがりな人がいるかもとサニーレタスをぜんぶ剥がした
牙を剥くなにかを思う〈へくわ〉というルビの振られているほうせん花

だから春って

それなりのあかるさだった食卓を四葩のごとく囲んだ日々は

嘔吐するように泣いたらまぶたからしゅわりしゅわりと老いてゆくなり

立ち上がるために手をつくテーブルはやさしい猫の声で軋んだ

散るために咲くような花があるでしょう？だから春ってきらいなんだよ

麻酔より痛みを選ぶ人がいると聞かされたのち麻酔打たれる

雨男だからわかるよ会えそうな予感で泣いてしまう四月に

後悔はいつまで残る 骨だけになってもビニール傘だとわかる

おじいさんが桜の枯れ木に撒いたのは犬の骨だと思ってたんだ

花びらがどこにも行けぬ吹きだまり春に眼窩があるならここだ

新緑のさくら並木を歩きたい骨壺の重さなんかは知らないままで

自己紹介

1979年生まれ。東京都在住。

塔短歌会・たんたん拍子・絶島所属。

大森静佳さんのオンライン短歌講座「短歌の窓」受講中。

「あかるくない」とその他の連作／榎本ユミ

2025年2月10日発行

どんぐり坂

この坂をどんぐり坂と呼ぶひとのころがるような遠き日のこと
テーブルの上に測量図をひろげ父亡き後の世界を話す

このままでいいのかという問いかけに毛玉だらけのカーテンは揺れ
紫陽花は立ち枯れていて道路沿いの家が道路になっていく街
だれからも見つからなければ遺跡とは呼ばれなかった穴を見ている

最後に駆ける

掻きむしった生々しい痕 この脚が最後に駆けたのはいつだろう
いつまでもあなたの歳に追いつけないことに安心する神無月
舌先をしめらす程度の水を飲む父の身体に兆す冬ざれ
父の目を覗きこめない ユースキンを両手にのぼして頬をつつめど
この家にもう戻らない想像をすれば色褪せていく鶏頭
顔面が墨色になるパックして隠しごとならまだまだ増える
細く開けた窓から微風 わたくしが最後に駆けるのはいつだろう

水じゃない何か

火葬場へむかうマイクロバスで見た街はさびしい揺れ方をする
骨壺に全て納めるため砕くしかない骨の乾びた響き
天井が高かったかもしれないと話す卯月の火葬場のこと
水じゃない何かで薬をのむ人を見ており狭い休憩室で
やさしい人は人を許せると書いてあるへおばあちゃんのぼたぼた焼へに
薙ぎ倒すような口調に気がついて多めにミルクを入れるカフェオレ
従兄の死を聞いたそのとき浴室でカビを殺していたんだったな
水が出たままのシャワーは手を離れ毒でも服んだようにのたうつ

初出

あかるくない…第24回NHK全国短歌大会入選作品集 近藤芳美賞 佳作

だから春って…たんたん拍子Vol.4

どんぐり坂…西瓜第10号「ともに欄」

最後に駆ける…塔・2024年1月号

水じゃない何か…塔・2022年9月号

「あかるくない」とその他の連作／榎本ユミ

2025年2月10日発行